

# データ アラカルト

Q：気付きが深まる過程とは、どのようなことですか？

A：段階性をとらえることが重要

関係付けたり、意味付けたりする指導を

気付きは、体験的で感覚的、主観的と言いますが、すべては体験に根ざしています。それが子どもなりの認識であって、最初からねらい通りの反応をするわけではありません。

例えば、「おにごっこは、楽しかったです」と言った子どもの言葉があるとします。確かに深い気付きとは言えませんが、この言葉の裏には子どもなりの様々な気付きがあると考えられます。人とかかわった中での楽しさなのか、遊びの種類そのものから体感した楽しさのことなのか分かりません。その子が遊びというものにどれくらいの経験があるのかを、まずは知る必要があります。

以前、「知的な気付き」という言葉がありました。もちろん今も大切にされている考え方ですが、子どもの気付きには段階があると考えられます。

第1段階は、対象に対して受動的な気付きです。「砂場は楽しかった」「木の実がたくさんあった」というものです。まだ、対象からの情報に引きずられている場合もあります。第2段階は、対象にはたらきかける段階の気付きです。思いや願いを生むということと表裏一体かも知れませんが、「砂場で水遊びしたら楽しそう」「アイロンをかけるとしわが伸びたので、自分もやってみたい」

「木の実でコロコロ遊びができるよ」などといった言葉です。第3段階は、目的をもつ段階です。自分の見方や考え方がはっきりしてくるような気付きです。

「家族を喜ばせよう」と考えたときに、自分の次の行動を誘発したり、決定したりします。これは、様々な状況を自らが整理し、たどり着いた考えです。質が高まったと言える段階です。「役に立ちたい」「役に立った」という思いが自立につながっていくと考えることができます。

これらのこととは、無自覚な気付きが自覚的な気付きに変化したと考えることができます。子どもが対象とかかわって、「～したら楽しいのでは」ということは、無自覚的な要素が強いと思います。それに対して、「秋になったから店の～がかわった。それは～だからだ。季節によって店も変化するんだ」というのは自覚的な気付きです。「どうして変わったか」ということは、子どもにはわかりにくい内容かもしれません、「どう変わったか」でしたら子どもは答えられます。「茶色いものがふえた」、「なぜ？」と聞いてあげます。「枯れ葉が増えたから、茶色いものが増えたんだと思う」という答えには、季節の特徴と商品とが、子どもなりに関係付けられていると言えます。